

ホスピタルアートのご紹介

副院長

近藤 ときえ

今年度、1階外来エスカレーター横に「和」をテーマにしたアートを展示しました。この取り組みは、「待合や通路が白とブルーで寒々しい」「絵やアートがあると心が和む」など、患者さんから頂いたご意見をきっかけにスタートしました。ホスピタルアートについては、欧米では20年近くの歴史があるといわれていますが、日本ではまだ始まったばかりです。大きな窓ガラス一面に鯨がゆうゆうと泳ぐ海を表現したものや季節の木々や動物をテーマにしたものなど、他院においても工夫があります。当院のアートは、緩和ケア病床前室廊下に次いで2か所目となりますが、いずれも札幌市立大学デザイン科の学生の皆様のご協力をいただき完成しました。北海道らしさを盛り込みつつ、日本文化をもとにした落ち着きと楽しさ

を感じられる空間となっています。無事に帰り幸運をよぶツバメ、悪いものから身を守る番傘、厳しい冬を超えて春に力強く咲く桜、回復を願う折鶴など、一つ一つのパーツに患者さんへのメッセージが込められています。

松沢哲郎氏は「想像するちから チンパンジーが教えてくれた人間の心」の著書の中で、「人間は容易に絶望してしまう。でも、絶望するのと同じ能力、その未来を想像するという能力があるから希望が持てる。どんな過酷な状況の中でも、想像する力を駆使して希望を持てるのが人間だと思う」と述べています。病院には、身体的にも精神的にもいろいろな悩みや思いを抱えた患者さんやご家族の方々がいらっしゃいます。そのような方々がアートによって、心を癒し和み、思わず微笑み、辛さから解放される瞬間を作りだす、そんな人間の持つ治癒力・回復力を高めるお手伝いのできればと願っています。

これからも、見て体感する全ての方々が、想像を膨らませ「希望」が持てる空間作りを大切にしていきたいと考えております。



1階外来エスカレーター横



緩和ケア病床前